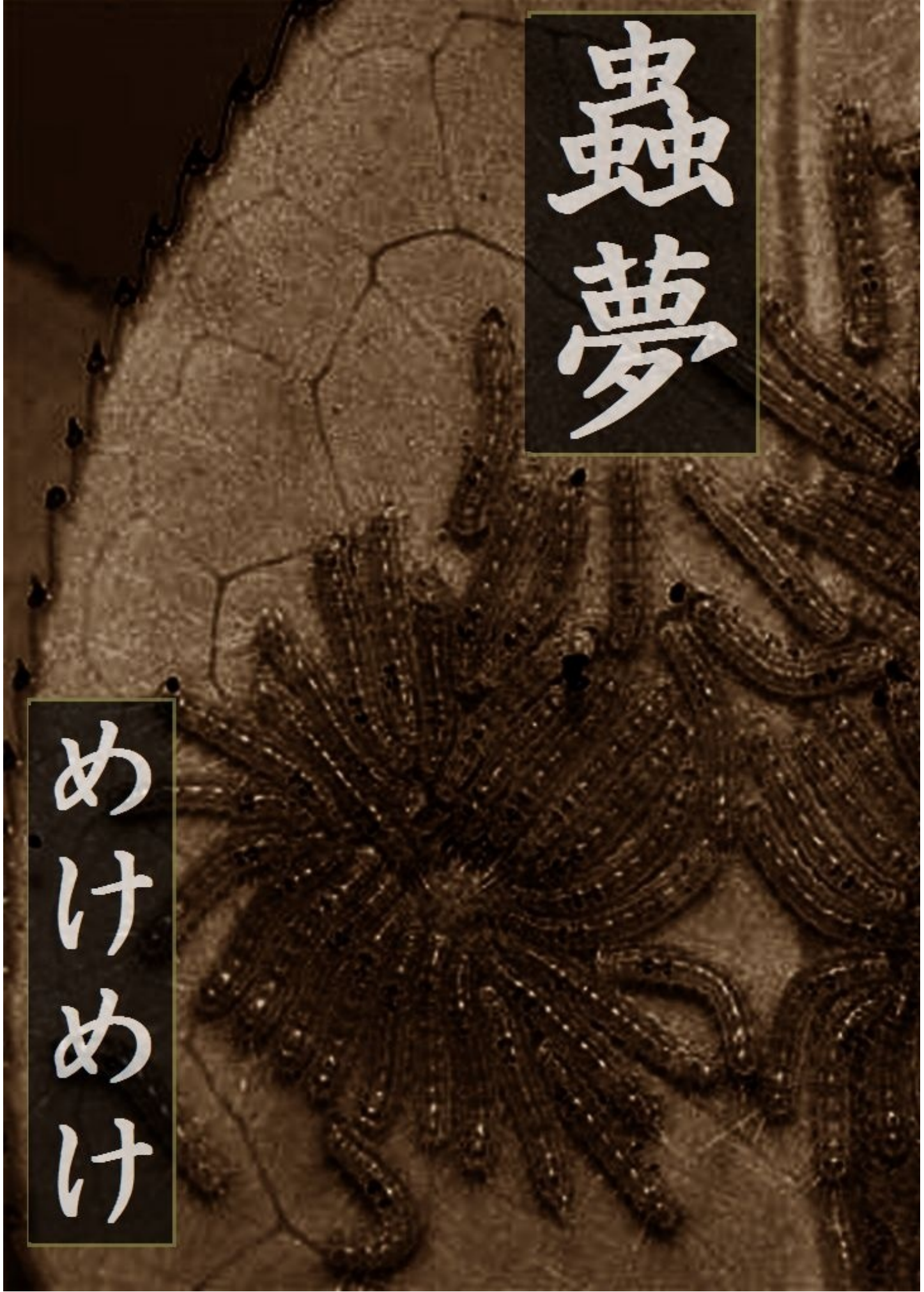


虫
夢

め
け
め
け



思い出の桜

用事がある妻を残し、子供二人と実家へと帰った。春——目黒川は桜の花びらが舞い落ち、水面はピンク色に染まる。私が育った町——品川は、昭和の面影を多く残しながらも次々と新しい建物が建設され、当時の風景からすると、よりアンバランスなものになっていた。

実家に連絡を取らずにぶらりとこの町にやってきたのは、子供たち——小学5年生になる娘とそのふたつ下の息子に、自分が最も美しいと思う桜並木を見せようと思ったからだ。私が通っていた小学校は入学当事で100年の歴史を有していた学区内でも一番古い学校で、山手通りに面して校門があり、そこから校舎までは100メートルほどあるのだが、校門から校庭脇に至るまでは幅15メートルほどの通路のようになっておりその両脇には桜の木のトンネルになっている。今から38年前、私は、桜の花がヒラヒラと舞い落ちる中、母に手をひかれてこの学校に入学をした。母が学校の行事に和服を着ていったのは、あれが最初で最後だったと思う。

子供の頃には、それほど美しいとは思わなかったが、学校を卒業し、社会人になって桜の花を愛でるようになってからは、私の記憶の中でもっとも美しい桜であると位置づけていた。だが、実際はどうであろうか。思い出は美化されるものである。私はこれまでその思い出を大切にすればかりに、実際に母校の桜の木を大人になってから見に行ったことはなかった。

形あるものはいつかなくなる。そんなことは使い古された陳腐な言葉で、実感するようなことはそれほどなかったが、大きな震災を目の当たりにし、形あるうちに残しておきたいのなら、早いうちがいいと思うようになった。いや、それは後から思いついた理由である。たぶんそういうことがなくとも、たとえ自分に家族がいなくとも、私は今年、このときに、この場所に訪れていただろう。

不思議なことというのは、あるものなのだ。

品川を離れて、10年がたつ。今住んでいる江戸川区から実家までは電車で1時間ほどの距離である。母校に行くのなら、京浜急行がいい。だが、桜の木を愉しむのであれば、浜松町からモノレールで天王洲アイルまでいくのがいい。車窓からあちらこちらで桜の木を見ることができる。真上からみる桜もわるくない。天王洲アイルを降りたら、目黒川沿いに歩く。途中神社を歩いていくのもいい。川沿いの道は桜の木がずっと先まで並んでいる。良く晴れた日の午後、ビデオカメラとデジタルカメラを持って、ここぞと思うポイントで写真を撮る。途中すれ違う人々と、気持ちのいい会話をするのもいい。母校に近づくに連れて自然私の気持ちは昂揚していた。なんて、美しい風景だろう。そして、その頂点にあるのはあの桜並木。桜の花びらが舞い落ちるトンネルは、さぞかし感動的な場面になるだろう。子供たちだって、喜んでくれるにちがいない。

川沿いの道を横にそれ、そこから200メートルほど行ったところに、学校の門が見えたとき、興奮は最高潮に達した。

「ほら、みてごらん！あれがパパの通っていた小学校なんだ」

子供たちは流石に桜の木を見るのは飽きたらしい。目黒川に浮かぶ桜の花びらのじゅうたんを見たときには「すごい」「きれい！きれい！」と喜んでいたが、結局のところ、子供は見るだけではつまらない。学校のそばには、少し大きな公園があり、コンクリートで作られた大木をモチーフにした滑り台や恐竜のオブジェなど魅力的な遊具が並んでいる。そこで子供たちを遊ばせ、私は学校へと急いだ。

「おや、なんだ。あれは……」

そばまで来ると、校門になにやら立て看板がついている。建設工事の案内板の用である。そして校門横にあるべき建物がなくなっていることに気づく。

「桜堂がなくなってる」

桜堂――母校の横に隣接した文房具店である。学校の校章はここでしか扱っていない。朝は店の前に人だかりができています。工作で使う文房具や画用紙、新しいキャラクターの下敷きや、フルーツの香りのする消しゴム。人当たりのいい『気のいい老夫婦』の営むこの店は、児童みんなに愛されていた。

約40年。おそらくは二人ともこの世を去っていることだろう。それにしてもつい最近までは建物があったと言うことのように。そして校門から中をうかがうと、そこには信じられない光景が私を待ち受けていた。桜の木も、落ちてくる花びらも、そして桜の木のトンネルも健在であったが、その先に見慣れないものが私の行く手を阻むようにそこにはあった。

「学校統合。取り壊し工事实施計画……」

この校門からの通路は小学校だけのものではなく、同じ敷地内に小学校と中学校がある。向かって左が小学校。右が中学校である。その中学校があるべき場所に真新しいコンクリートの建物がそびえ立ち、母校は工事用の柵で囲まれ中に入ることにはできない。3階建ての建物の中央にある時計は、3時10分を指して止まったままである。私の母校は死んでいた。

小学校と中学を統合し、小中一貫の教育システム……ニュースでは聞いた事がある。だが、それがこんなことに。自分の母校がなくなるなんて。

田舎の小学校や街中でも子供の人口比率が低下して廃校や統合される学校があることは聞いていた。しかし、品川は近年でも新しい建物ができ、若年層の人口も他に比べれば多いように思っていた。まさか、自分の学校が亡くなるはずがない。これだけの歴史を重ねた学校がなくなるはずなどあるはずが……

新校舎と母校の間の道は通ることができる。母校を囲むように新校舎は建設されていた。どこまで行けるのか、ビデオカメラを回しながら、私は取り壊される運命を待つ建物を撮り続けた。校舎の横を通り、裏側へと回れた。廊下から教室が見える。教室は全て扉が閉まっており、中を見ることはできないが、壁じゅうに落書きがしてある。どうやら、廃校が決まったときに、学校を公開していた様子である。思い出の学校を名残惜しむ言葉があちらこちらに見える。遠めなので、はっきりはわからないが、「ありがとう」や「さよなら」の文字はすぐに見て取れた。今

すぐにでも校舎の中に入りたい気持ちを抑えながら、私はビデオカメラを回し続け、そしてデジタルカメラのシャッターを押し続けた。

郷愁——それだけではない。見れば見るほどに、すっかり忘れていた昔の事が次々と思い出された。

「みんなどうしているかな……元気でやっているのか」

懐かしい思い出にまぎれて、私の背筋をゾクゾクとさせる出来事が思い起こされた。そう、私はきっと、そのことを思い出すために、この場所に呼ばれたに違いない。今日、この日このとき私がここにいるのは、きっと偶然なんかじゃない。私は呼ばれたのだ、あの頃の僕に——小学5年生のボクに。

小学5年のボク

ボクは小学5年生——やんちゃな盛りの都会の小学生。都会といっても昭和の都会。あの頃、都庁がまだ丸の内にあり、上野動物園にはパンダを一目見ようと長蛇の列を成していた時代。ボクの住んでいた町は、東京の山の手と下町のちょうど中間あたり。ボクらの遊び場所は、公園、お寺や神社の裏手、アパートの屋上、時には休日の町工場なんかに忍び込み、ささやかな悪事を働いていた。

私が思うに——小学5年生という時期は、子供から少年、そして青年へと成長してゆく過程において『出発点』或いは『分岐点』みたいなものかもしれない。まじめに働く両親の下で育ち、どこに行くにもくっついてくる2歳下の弟がいた。「長男としての責任感みたいなものを感じ始めたのは、妹が生まれたときだったと思う」と、酒の席で弟と話したのは、私の結婚式の前日だったか。

ボクが小学2年のとき、体が弱かった母が無理をして生んだ妹。『赤ん坊』という人の手を借りなければ生きていけない存在は、ボクにしっかりしなきゃいけないと思わせた。小学5年の頃には、仕事で遅くなった両親のかわりに。妹を保育園まで迎えにいったこともあった。学校の成績は『普通』であり、特に担任の先生に心配をかけることもなければ、期待をかけられるようなこともなかった。学級委員の下の副委員という役職は、そういう存在の象徴のようなものかもしれない。

ボクはごく身近な大人たちの期待に表向きは応えながらも、いたずら好き、冒険好きの少年らしさ、子供らしさを持って余っていた。学校で頭が上がらないのは最上級生の6年生。だけど『最上級生である』という責任感がない分、小学校生活の6年間で『最高に自由な時期』だった。

あの頃の私——『ボク』というのは『自分が何をしたい』ということと『何ができて、何ができないか』と『何が許され、何が許されないか』ということの区別がつきながらも、『少年の心』は、いつも自由で、わがままで、遠慮がなかった。

それが小学5年のボクだった。

ボクの通っていた小学校は、区内最初にできた公立の小学校で、100年以上の歴史を持っていた。幹線道路に面した校門から校舎までの間には、50メートルほどの見事な桜並木は、春が来るたびに、この学校に通うことを誇らしく思わせてくれた。

校舎の裏手は高台になっており、栗や柿の木、ブナやツバキが自生している。日当たりのいい場所ではなく、どことなくじめじめとしたその場所には、毎年毛虫が発生する。これに刺されると患部は大きくはれ上がり、ひどい時には熱を出したりする。校舎の裏には用がないときは入らないようにと毎年、朝礼や学活（いわゆるホームルーム、学級活動）で注意が促されていた。

ボクは毛虫に刺されたことはない。だけどあのグロテスクな姿が嫌で、できる限り近寄りたくないと考えた。毛虫のことだけが理由ではないが、誰も進んで校舎の裏には行かなかったし、子供の興味を引くようなものは、何もなかった。

毛虫はときに、校舎の壁を伝って、窓から見えるところに張り付いていることもある。校舎の裏の窓は、虫が入らないように締め切っていたので、毛虫が校内に侵入することはまずない。たまにイタズラ坊主が、校舎の裏から小枝に毛虫を乗せ、女の子を追い掛け回すこともあるが、たいていは先生に見つかって、こっぴどく叱られるのがオチだった。或いはそんな遊びの中、毛虫はちよん切られるか、踏み潰されるか。子供がおもちゃに飽きたときは、たいがいそういうことになる。ボクはそれに参加することもなければ、とがめる気など、さらさらなかった。ちよん切られた毛虫は、すぐには死なない。死んだ毛虫の毛には毒があるから近寄らない。それにつぶれた毛虫からでる体液は、それを見る者に、なんともいえない嫌悪感を与える。

ボクのクラスには、男女合わせて30人くらいだった。男子のグループは野球やドッチボールをして遊ぶグループと「ごっこ遊び」やゲームをしたりして遊ぶグループに分かれていた。もちろんこの時代にコンピュータゲームなどない。「○×」や「25」というビンゴゲーム、ジャンケンのさまざまなバリエーション—子供は遊びの天才だ。普段は一緒に遊ぶことのないふたつのグループではあるが、いくつかの遊びでは行動を共にする。

それは『いたずら』『冒険』『内緒話』

初夏のある日のこと、町内会の少年野球チームでレギュラーのK山は上級生から、こんな情報を聞きつけてきた。

「桜堂の裏ってどんな風になっているか知ってっかあ？6年がこの前そこに行ったんだって」

K山が得意げに話し始める。

「あそこは入れないだろう」

S夫が問いただす。

「桜の木を登って横に伸びた枝を伝わって行くと十字鉄線に引っかからないで塀を乗り越えられ

るポイントがあるらしいんだ。下に降りると桜堂の倉庫になっている小屋があって、いろんな文房具が置いてあるんだぜ。で、カギが掛かっているらしいんだけど、今、その扉のカギが壊れていて、倉庫の中に入れるらしいぜ」

みんなすっかりK山の話に夢中になった。小学生にとって文房具店の倉庫というのは、まさしく『宝の山』である。まして普段立ち入ることのできない場所、『塀の向こう側』がどんなふうになっているのか、どんな宝物が眠っているのか……

強い好奇心——冒険心のせいで、その行為が『不法侵入及び窃盗』にあたる違法行為であること——つまり泥棒のやることであることに誰も気づくしていない。いや、或いは気づくいていても口に出さないだけなのかもしれない。

「これがそのお宝。6年3組のA次君がオレにだけくれたんだぜ。6年は他にもいろんなものを持って来たみたいだぜ」

K山の声が小さくなるほど、話は盛り上がって行く。そしてお約束のきめ台詞。

『お前ら、絶対に誰にも言うなよ』

黄色いビニールテープ——大人からすれば、どうということはない代物だ。しかし、あのときのボくらにとってビニールテープはそれほど身近な存在ではなかった。紙を貼り付けるのに使うのはたいてい『ヤマトのり』だったし、学校の道具箱に入っていたのは、ハサミ、のり、三角定規、分度器、コンパスであり、カッターやセロテープは誰もが持っているものではなかった。

黄色いビニールテープ——それがタダで手に入る。なんて魅力的な色なんだろう。

「6年は石膏とか工具とか持ち出したらしいぜ」

K山はまるで自分のことのように自慢げに話した。

石膏——図工の時間に何度か使ったことがある。水で溶かして型に流し込み、それが乾くと石のように固まる。ビニールテープよりもさらに魅力的だがしかし……

果たしてそんなことをして大丈夫なのだろうか？ 同じ疑問を持ったS夫が口を尖らせながら切り出した。

「えー、やべーんじゃねー」

そう、確かにそうだ。これは『ヤバイ』でもどうするかは別としても、こんな身近に、冒険心をくすぐられる場所があったなんて！ 行ってみてみるだけなら、覗いて見るだけなら、触ってみるだけなら

「どうする？ いってみる？」

S夫が言い出した。

「やべーよ」

U治は慎重だ。

「石膏だよ、石膏」

G朗はやる気だ。だがK山は逃げた。

「知んねーぞ。6年にバレたら半殺しだぜー」

K山はビニールテープの自慢がしたかっただけで、何より「ここだけの話」を誰かにしたかっただけなのだ。『盗み』はヤバイ——K山はクラス一番の悪ガキだが、分はわきまえている。本当にヤバイことには自分で手を出さない。

ボクもヤバイと思う。興味はあるけど、それはできない。結局その話は一旦そこで終わった。どうやら自称「探検隊」のG朗とS夫、いつもこの二人と行動をともにしているU治が倉庫に忍び込むかどうかで、休憩時間にこそこそと話をしている。6時間目の授業が終わると塾や習い事がある連中は、さっさと帰ってしまう。ボクは掃除当番。同じ班のU治とT字ほうきで教室の床をはく。女子は黒板と机の上をきれいに拭いている。G朗とS夫はU治を廊下で待っているようだ。

「なあ、もしかして、『あそこ』に行くのか？」

ボクはU治に聞いてみた。

「前にさあ、S夫がボールを塀の向こうにいれちゃってさあ。塀を登ろうとしたらしいんだけど、用務員のおっさんに見つかって入れなかったんだって。もう、ボールは見つからないと思うけど、ボールを取りに入ったってことにすれば、まあ、誰かに見つかっても平気じゃないかって、S夫が言うんだ……」

クラスの中では誰よりも好奇心が旺盛なU治がこの話に乗り気ではないのは、U治に勇気がないからではない。U治の父親はPTAの役員なのだ。厳格な父親であり、もしこんなことをしたことがバレでもしたら、それこそ6年にバレて半殺しどころでは済まないだろう。

「もう、何してんのー、早くしてよー」

班長のN子は、見た目はかわいらしいのだが、生意気で、気が強く、常に男子と女子の争いの中心にいる嫌な女だ。

『先生にいつけてやる！』——何度この言葉に脅されたことか！

「うっせーなー、すぐに終わるよ！」

U治はクラスの中では人気もので、モノマネをしたり、おどけてみたり、人を笑わせる才能に恵まれていた。U治はともすればケンカになりそうなキツイ言葉を使った時でも、相手を怒らせないよう、すぐにおどけてみせる。

U治はN子の方に向きを変え、頭を激しく左右に振りながら、T字ほうきを激しく動かす。「おいそぎですか レレレノレー」と得意のマンガのモノマネを始めた。

「もー、ふざけないでよ！」

言いながらN子は思わず噴出していた。

「U治まだかよ、早くいこうぜ」

教室の後ろの扉からG朗とS夫が顔をのぞかせて、U治をせかした。

「あー、もー、そんなに急ぐんなら手伝ってよねー」

U治は要領がいい。

二人のおかげで、掃除を早く終わらせることができそうだ。なぜならU治がふざけ始めると、N子が怒鳴るまで、U治はなかなかそれをやめない。

G朗とS夫の掃除のやり方は、いささか乱暴ではあったが、机を動かすのには人数が多いほうがいい。助っ人の活躍で掃除があっという間に終わるとG朗、S夫、U治は走って教室を出て行った。

「もう！廊下を走ったら、いけないんだからね！」

N子の声は、彼らの耳には届いていないようだった。

無茶しなきゃいいけど……

ボクはT字ほうきをロッカーにしまうとランドセルをしょって、教室を出た。階段を降り、下履きに履き替えて校舎を出ると、U治たちが校庭の隅の方、鉄製の登り棒があるところにランドセルや手提げカバンを置いているところだった。校舎の窓から校庭は一望できるが、桜並木は登り棒のある校庭の端から始まっており、校舎からは死角になる。放課後に校庭で鉄棒や登り棒の練習をする生徒はだいたいあそこにランドセルやカバンを置いていた。

ちょっと様子を見てこよう。N子とか女子に見つかったら、それこそ後で何言われるかわからない。

木を登ること自体はそれほど難しいことではない。誰にも見られないように、しかも3人が登るのは、さすがにリスクが高い。

あー、もー、危なっかしいったら、ありゃしない！

ボクは彼らの見張り役を買って出ることにした。

「ボクが見張っておいてあげるから、すぐに戻れよ！」

「サンキュー！戻るときは向こうから合図するから！」

G朗はそういうと、すばやい身のこなしで桜の木をよじ登り壁に飛び移った。U治とS夫もこれに続く。

このとき、ボクらは開けてはならない扉『恐怖の入り口』に手をかけたことにまだ気づくいて

はいなかった。それは些細ないたずら心、子供の純真なる好奇心――他人の家に忍び込むとか、誰かの持ち物を盗むとか、そんな恐ろしいことではない――まだ見たことのない場所が、学校のこんなすぐそばにあって、そこには新しい発見や宝物があるかもしれない。壊れたカギが修理されたら、もう二度と見ることはできないかもしれない。

そう、小学5年のボくらには、こうする以外に他はなかったのである。

扉の向こう側

小学校の校門から続く桜並木。その並木に沿ってすっかり苔むしたコンクリートのがっしりした壁が並び立つ。校門の横の桜堂は、学校御用達の文房具店で、学校の校章をはじめとして、書初めに使われる半紙や絵の具、クレヨン、画用紙、工作用紙など、様々な商品を扱っている。この学校に通う生徒は、一度はここで買い物をしたことがあるはずだ。この文房具店桜堂は、店の佇まいからみても、かなり歴史のある文房具店で、気のいい老夫婦の営むこの店を悪く言うものはいなかった。老夫婦の耳が、少しばかり遠くなってきてはいること以外は……

ボクらは、そんな気のいい老夫婦を困らせるようと思ったわけではない。G朗もS夫もそんなことを考えてなかったし、U治の親はPTAの役員だ。ボクらはただ、普段は開けることにできない扉がそこにあり、その中を覗いて見たいだけだった。冒険心と好奇心だけがボクらを突き動かしていたし、そこまで行った証として、何か欲しいと思っただけだった。もし、この行為が本当に『やってはならないこと』であれば、行為の途中で誰かに見つかるに違いない。怒られて未遂で終わる。或いは、もうカギが修理されて扉はかたく閉ざされているかもしれないし、持ち帰れるようなものがないかもしれない。

いずれにしても、本当に『やってはならないこと』を小学生のボクらがやろうとしても、そう簡単には事は運ばないもので、世の中のルールや仕組みはそんなふうになり立っている。それに、成功したからといってボクらが味をしめて、なんどもそれをやれば、必ずろくなことにならない。これはいたずらの数々をこなしてきたボクらの経験から学んだ法則であり、ルールなのだ。

『やってはならないことは、やってみないとわからない——ただし、慎重に、そして、一度だけ』

ボクらはこの日、いたずらの法則とルールに従い、見事に冒険を成功させた。G朗、S夫、U治の3人が桜の木を登り、枝を伝わって、高さ2メートルほどある壁の向こう側の様子を注意深く覗いている。

「よし、行くぞ」

G朗の掛け声とともに3人の姿は壁の向こう側へと消えていった。ボクは校舎のほうに気を配りながら、誰かがこちらのほうに来ないか、ハラハラしながら奴らの帰還を待っていたが、この日の運はボクらに向いていた。

「おい、大丈夫か？」

G朗の声が壁の向こうから聞こえた。

「急げよ、早く！」

まるで刑事ドラマか特撮ヒーローのようだった——或いは、土曜夜8時のコント番組か。

「これ受け取ってくれ」

壁の向こうからこちら側に何かが投げ込まれた。

「戦利品だ」

G朗の声だったか？

「これも」

今度はボールが投げ込まれた。S夫のボール？だが、投げ込まれたボールは1つではなかった。それはあまりにもあっけなく、そっけなく、味気のない、期待していたよう冒険ではなかった。

「やばいと思ったから、これしかもってこなかった」

G朗たちが「戦利品」と言って投げ込んだのは、ビニールの袋に包装されたガムテープだった。K山のビニールテープに対抗してのことなのか、少しだけそれを上回るもの。だとしたら実にシンプルな選択だ。

「で、中はどうなった？」

ボクはG朗に聞いてみた。

「とにかく、これを隠さないよ」

U治は、不安げな様子だ。確かにこんなところを誰かに見られでもしたら厄介だ。特に女子には。ボクらはガムテープとボールを上着の中に隠して、急いでランドセルが置いてある登り棒のところまで行った。校庭には何人かの生徒がボール遊びをしたり、鉄棒や、ゴムとびをしたりして遊んでいた。その中にN子の姿を見つけると、これは、ここでランドセルを開けるわけにはいかなかった。

「おい、どーする？」

S夫はN子が大の苦手だった。

GW前、漢字の小テストの時に、机の上にこっそりと答えを書き込んでいたのをN子に見つけられた。先生にはチクられなかったものの、60点以上を取ることができずに居残りをさせられたことを今でも根に持っているようだ。

学校から出るという選択肢もあったが、この状態で、桜堂のそばを通ることはできない。ボクらの頭の中は、一刻も早くランドセルに隠したい、或いは、しっかりと手にとって『戦利品』を眺めたいという誘惑が交差していた。

「今日は木曜日だから校舎の裏なら誰もこないよ」

U治は清掃係で、時々学校の裏にある焼却炉が何曜日に使われているかを知っていた。たしかG朗は保健係でS夫は体育係だった。ボクは新聞係だった。

「よし、行こう」

ボクらは校舎の裏に行くのに「お前、忘れ物するなよー」とわざとN子に聞こえるように言いながら、校舎の中に一旦入ってから、校舎の裏へと回りこんだ。こういうことをしているときは本当に楽しい。まるで秘密作戦を実行しているようなワクワク感がボクらの脳を支配していた。

こんな時のボクらは最高である。

校舎の裏側には高台があり、人目にもつきにくい。薄暗くて、じめっとしているし、ひんやりとしている。校舎の廊下側からは当然丸見えではあるが、木の陰や、物置の影など死角はいくらでもある。ボクらはリヤカーや壊れた机や椅子といった粗大ゴミが置いてある物置の裏側に集まった。

「やべー、超こえー」

U治がいつもの調子でおどけながら、目を輝かせていた。

「早くしまおうぜ」

S夫はN子が気になるのか、意外とこういうときはオドオドするタイプだ。ボクらは服の下からガムテープを出して、ランドセルを開けた。

「すげー、ビニールテープよりぜったい高いぜ！」

G朗はK山のグループから、小バカにされていた。跳び箱や鉄棒、縄跳びといった運動は得意なG朗だったがボールを使った遊び、特に野球は大の苦手だった。G朗には、キャッチボールをする父親や兄弟はいなかったのである。ドッチボールでは巧みな身のこなしで、最後まで残る運動能力を持っていたが、野球となるとバットにボールを当てることができなかった。なぜならG朗は、バットの使い方を知らなかった。人数あわせにG朗がいよいよ野球をやった時のこと、G朗のバットを持つ手は、右手と左手が上下逆だった。K山はそれを大声で笑った。それ以降、左手を上、右手を下にするバットの握り方は「G朗打ち」と名づけられた。

「なあ、なあ、中はどんな感じだった？」

ボクには、ガムテープよりも扉の向こう側の様子が知りたくて仕方がなかった。

「奥に行くと空地みたいになってて、けっこう広いんだ。植木とか盆栽とかいっぱい置いてあるんだ。で、古い小屋みたいなのが立っていて、扉のカギは壊れてるんだけど、開けようとするときぎぎ音がするんだよ。気づかれたらやばいと思って、ちょっとだけ扉を開けて手探りで近くにあったものを持ってきたってわけ」

ボクの質問に興味した口調でG朗が答える――なるほど中はそうなっているのか。

「あとなんかよくわからない工具とかあったけど、あればヤベェじゃん、なんか高そうだったし」

S夫が付け足した――いたずらの域を超えないこと――これも大事なルールである。ボクらはしばらく扉の向こう側の様子がどうだったかという話で盛り上がっていたが、S夫がランドセルに戦利品をしまおうとランドセルを開けるなり「うわー、入らないかもー」と言い出すと、みんなランドセルを開けだした。

確かにガムテープは以外にかさばる。U治とS夫は当時流行していた多面式筆箱、両面が開くだけでなく、さらに3面、4面と開くようになっている筆箱を使っていた。U治とS夫は、しかたなくランドセルの中身をいったん全部出して、なんとか入れようとするが、なかなかうまくいかない。ボクとG朗の筆箱は缶ペンケースだったので、それほど苦労せずに入れることができた。

不意にU治が立ち上がる。物置の壁になにかを見つけたようだ。

「ゲゲッ！」

U治がいつものおどけた口調で驚きの表現をする。U治が見つけたのは大きな毛虫だ。

「ギョエー！」

U治のテンションがあがる。よく見ると毛虫は1匹だけではなく、壁のあちこちに張り付いていた。大きさは2センチ程度の小さなものから4～5センチくらい大きなものまで、3種類ほどいた。

「大群、大群、毛虫の襲来だあああ」

G朗も調子に乗る——ボクは気持ち悪かった。一度にこんなにたくさん見るのはもしかしたら始めてかも知れない。そして嫌悪感。この世に存在してはいけないものなのではないか？

「退治しないと学校が占領されちゃうぞ」

S夫はすっかり特撮ヒーローの世界に浸っている。しかし、小学生の発想は、そういうものである。

次のゲームはスタートした。一つのミッションをなんなくクリアしたという達成感が、ボクらを更なる難易度の高いミッションへと使命感を燃え上がらせた。

もはやボクらの目には、毛虫は害虫であり、ボくらには「悪いことをした分、何かいいことがしたい」という気持ち——害虫を退治すること——で道徳的な後ろめたさから逃れられるのではないかと、そういう思いに駆られていたのかもしれない。

「そうだ！いいこと考えた！これを使っちゃおう！」

S夫はランドセルにはいりきらないガムテープを包装袋から取り出した。ボくらが手に入れたもの……気のいい老夫婦の営む、みんなに愛される文房具店の倉庫から盗み出したガムテープ。小さな虫が張り付いたらまず生きては、逃れられない強力な粘着力。『後ろめたい気持ち』と一緒に家に持ち帰るはずの『戦利品』を使って害虫退治をすることで、『罪の意識』を置き去りにできるのだと考えたのかもしれない。

かくして強迫観念によって捏造された絶対の正義を信じて疑わない小学生による、小さな生き物の大量虐殺が始まった。

手に入れたもの

盗み出したガムテープを何に使うか？

そもそも小学生にガムテープは必要ないし、必要がない上に盗んだガムテープであれば、なおさら使い道がない。持って帰って親に見つかれば、悪事の全てがバレてしまうかもしれない。下手をすれば学校を挙げた問題にもなりかねないし、あの気のいい老夫婦にも知られてしまう。

もう、桜堂で買い物ができなくなってしまう。

みんなから忌み嫌われている毛虫を退治するのにガムテープは実に有効的な手段に思えた——まさしく名案だ。毛はテープに張り付いて飛ばないし、小枝に引っ掛けて使えば、距離を置いての「攻撃」が可能である。しかも、つぶしてしまった時のあの体液。おぞましい液体を見ないで済む。ボクらはやっきになって毛虫を探し出し、次々に攻撃をした。

一方的な虐殺。

ヤツら、木の葉っぱを食べる悪いやつらだ、みんなから嫌われている。ボクらはみんなのかわりに害虫を退治しているんだ。これはいいことなんだ。

正義なんだ。

そう、学校みんなのために。だから、このガムテープはみんなの役に立つんだ。あの気のいい老夫婦も害虫退治に使ったと知れば、許してはくれないまでも、少しはわかってくれる。

そう、きっとわかってくれる。

戦況は圧倒的なものだった。ヤツらはのろまで間抜けだ。用は触らなければいいのだ。弾薬はたっぷりある。

ボくら4人力をあわせれば、こんなヤツ、イチコロだ！

もし、毛虫がつぶれて屍骸になる様をみていたら、ここまでのことはできなかつたかも知れない。ガムテープに貼り付けて毛虫を見えないようにして、焼却用のゴミいれの中に捨てる。毛虫の死の瞬間を見ないで済む。そのことが、ボくらが生き物の命を奪っているという事実から目を背けさせることになり、30分もしないうちに50匹以上の毛虫を殺させた。

毛虫は黒いモサモサの大きなやつと白い毛の長いやつ、それと一番数が多かったのが長さ2セ

ンチから3センチくらいの毛が少ないが地肌がグロテスクな模様をしているやつ。

その頃あまり毛虫に詳しくなかったが、これがチャドクガという種類で、この毛虫の毒がかなりやっかいなものだと、大人になってから知ることになる。

大きいヤツはだいたい単独で行動しているようで、それほど数は見つからなかったが、チャドクガは一つの樹木に大量に発生していることがある。大量の毛虫の群がる姿はなんとおぞましく、禍々しいことか！

その禍々しさゆえに、ボクらは自分たちが残酷なことをしているのだという事実から遠ざけていたのかもしれない。

「これだけやれば、もういいだろう」

S夫はすっかり英雄気取りだったが、U治はこのゲームに飽きたらしく、いつもの公園に行こうと言い出した。かくして毛虫狩りは終わった。ボクらは入念に犯行現場を隠し、毛虫の張り付いた戦果といっしょに、まだたくさん残っているガムテープを焼却用のゴミ置き場に放り込んだ。

これですべて終わり。

初夏の夕方は一番長い。まだ暗くなるまではだいぶ時間がある。ボクらは、U治の提案を入れて公園に行くことにした。もう一つの戦利品。U治がなくしたカラーボールとふたつのテニスボールとふたつの軟式ボール。次はボールで遊ぼう。

校舎の裏から誰にも見つからないように下駄箱の方に入った。そこから校庭を覗くとすでにN子の姿はなかった。すべては計算どおり、思いどおりである。

ボクらの勝利だ！

公園に行くには、校門を出て左に曲がり学校の敷地をぐるっと外回りして高台に上らなければならない。当然に桜堂の前を通らないとならない。誰も口には出さなかったけど、心のどこかで、後悔のようなものが、ざわざわとこみ上げてくる。

そんなはずはないのだ……そんなはずは……

だってボクらは『悪いことをしたわけじゃない』いや、イタズラはしたけど、すごく悪いこと——こんなに後ろめたい気持ちになるような、悪いことはしていない。そう思っていたのに。きっと、これから学校に通うたびに、こんなふうに、心の奥で何か騒ぐようになるのだろうか？その『ざわざわとするもの』に耳をかたむければ、ボクは聴きたくもない『良心の声』を聴くような気がした。だから、ボクは、そしてきっとボクらは、その『ざわつき』を無視するしかなかった。

桜堂の前を顔を下げ、ボクらは小走りで公園へと急いだ。横目で店内を覗くと、そこにはいつもと変わらない店の佇まいの中に、文房具を買っている女子が、ちょうど気のいい老夫婦にお釣りをもらうところのようだった。髪の毛はほとんど真っ白で、黒目や白目がほとんどわからないような細く垂れ下がった目は、いつもニコニコと笑っているように見える。

桜堂の気のいい老夫婦はいったい、何人の生徒を知っているのだろうか？

100年を越す、歴史を持った小学校の横で、どれだけの生徒とこのようなやり取りをしてきたのか？

そのシワシワの顔はすべて笑顔によってできたシワであることは、小学生にも用意に想像ができた。でも、ボクにはその細い目が、ボクらには違う表情にどこか疲れて、物悲しい表情に見えていた。ボクはボクの世界が変わってしまったことに気づくいた。

ボクは、ボクらは扉の向こう側の世界に足を踏み入れてしまったのだ。

ボクらは後ろめたい気持ちから逃れるように、いつもの公園へと急いでいた。曲がり角を越えるたびに、目的地へと近づいている安堵感とは裏腹に、いつもと微妙にちがう表情を見せる町並みに、ボクの意識はすっかりと興奮状態になっていた。普段は目に入らない建物の隙間、苔むした壁の黒ずみ――灰色の部分はやけにくすんで見えるし、苔の緑はどこか禍々しさを含んでいた。

公園へと続く坂道を登りきり――そういえば、この坂を下から一気に自転車で駆け上げられるようになったのは小学校3年の夏休みだったか――まるで逃げ込むように公園の中に駆け込んだ。

いつも遊んでいる公園はいつになく静かで、今日に限っては、同じ学校の生徒や小さい子供ずれの親子が砂場で遊ぶ姿もなかった。子供の笑い声が聞こえない、静まり返ったその場所は、どこか無機質で不気味さを感じさせた。砂場の周りに置かれたコンクリートでできた動物たちが、まるで動物の死骸のように見えた。

この公園は、高台の上であり、ちょうど学校の真裏になる。小さな子供が遊ぶための滑り台、ブランコ、砂場とどこにでもある遊具と、プロペラ飛行機を鉄のパイプで模ったようなジャングルジムがあった。砂場には野良猫のフンに時々大きなハエがたかっている。そのまわりにライオンやキリン、ゾウを象ったコンクリートのオブジェがある。ボクらはライオンからキリン、キリンからゾウへと飛び移る技を競った。

遊具のある、日当たりのいい遊び場と、学校の裏手へと続く散策路は、銀杏や桜の木が植えてあり、夏であれば風通しもよく、涼むのにちょうどいい。ボクらは木が生い茂るところには行く気になれなかった。当然である。あれだけの毛虫を先ほどまで、躍起になって『退治』してきたのである。

ボクらはS夫が塀の向こうから取り戻したカラーボールでキャッチボールをはじめたが、いつしかボールのぶつけ合いになり、そのボールを使った鬼ごっこにやがてそれは発展した。ボールを投げる、よける、ぶつけられたら、鬼は交代。シンプルだが、この公園には適度な障害物があるので、実にスリリングだ。そして何よりボクらは抜群に運動神経が発達していた。

誰も上れそうもない、壁や、木、飛び越えられないような幅の段差、潜り抜けられなそうなわずかな隙間もお手の物だった。野球やドッチボールではたいした活躍できないけど、こういうことならクラスの誰にも負けない自信があった。それにボクらは他の誰よりも公園や神社の隅々まで知り尽くしている。木の上から眺められる風景、どこの木にどの季節にどんな花が咲き、実がなるのか、どんな昆虫がどこにいるのか。トイレの屋根の上はどうなっているのか、公園のフェンスのどこに隙間があるのか。

この遊びの――ボール鬼ごっこの結末は大体決まっている。ボールが間単にはとれないところ

に転がってしまい、今度はそれを取り戻すことに遊びの主体が変わっていくのである。この日はU治が鬼のときにそれは起きた。

「あれー、ボールがないなあ」

U治の投げた渾身の一球はS夫の肩口から首筋をかすめって散策路の木々の中に入り込んでしまった。

「あー、あー、なくすなよー、ちゃんとさがせよなー」

S夫は口を尖らせて――こんなとき、S夫はいつも口を尖らせる。

「へんなところに投げるなよなあー」

みんなでボールを捜しに散策路へと入っていく。散策路の地面にはほとんど日が当たらない。それだけ木々の葉は太陽の光を独占しようと懸命に空に向かって伸びており、コンクリートで舗装されていない部分の土は、いつも湿った状態である。夕方も4時半を回ってだいぶ空気がひんやりとしてきている。散策路には行って、みんなあることに気づくいた。だれもいないと思っていた公園。

しかし、そうではなかった。『ヤマンバ』がいたのである。

ヤマンバー――いつからかそう呼ばれているのか？それはボクらがこの公園で遊ぶようになってからなのか、その前からなのか。ボクらの小学校に通う子供ならたいがい誰でも、少なくとも男子はみんな知っている存在。これといってボくらに対して何かするわけではない。子供にとって、ニコニコと微笑みかけてくれない老人は、どこか畏怖の存在である。いつも同じような農作業でもするかのような格好で、公園を歩き回る様はどこが不気味であり、子供のころ、物語で読んだ旅人を泊めては殺して食べていたというヤマンバという妖怪のイメージとすっかり重なってしまうのであった。

「やばい、ヤマンバがいるじゃん」

G朗が最初に口を開いた。

「ガビーン、やばいのだあ」

U治はいつもの調子でおどけた。

「早くボール捜してよ」

S夫はせっかく取り返したカラーボールをなくしたくないようだ。ヤマンバは木の根元にしゃがみこみ落ち葉をスコップのようなもので掻き分けて、何かを探しているようだった。誰かに聞いた話では、食べられるキノコが、ここに自生しているという噂があった。『毒キノコもあるからむやみに触らないよう』にと、理科の先生――いつもはやさしいが理科の実験のときにふざけて大目玉を食らった事がある――に注意された上級生がいるとK山がいていたのを思い出した。K山の上級生情報はおよそ信頼できるものだった。

「毒キノコでも探しているのかなあ」

G朗は、もはやボールを探そうとはしておらず、ヤマンバが何をしているのかが気になってしょうがない様子だ。ヤマンバはこちらのことを気づくしているのか？公園で大声を出して遊んでいたのはボクらしかいなかった。向こうは当然に気づくいているだろう。だが、ヤマンバはこちらには気づくかない様子で、黙々と落ち葉を払っては何かを探しているようだった。

「あった」

U治がカラーボールをみつけたようだ。

「なにー、ギョギョギョー」

U治の漫画キャラクターのモノマネは、ほぼ完璧であり、あのキャラクターにモデルがいるとすれば、きっとU治に似たやつに違いないとS夫とG朗と話したことがあるほど、U治のモノマネは完璧だった。

「なんじゃ、このキノコは！毒キノコ発見！」

S夫の青いカラーボールはオシロイバナの枝の下にあり、そこにはなんとも毒々しい黄色いキノコが生えていた。

「これ、毒キノコじゃねーか、そのボール、ヤバイよ！」

いつの間にかG朗も寄ってきていた。

「だって、どーすんのさ」

S夫が苛立ちを隠せない様子で口を尖らせる。

「平気だよ、洗えば」

ボクはそうやってS夫を慰めようとしたが、大丈夫だという根拠はなかった。だが、触っただけでどうにかなるような毒性の強いキノコなど特撮ヒーローの世界にしか出てこないのだとわかるようにはなっていた。

小学5年生なのだから。

S夫は口を尖らせながら足元に落ちていた小枝を拾いカラーボールをかき出そうとした。

「うわー、えんがちょー」

U治は両手の人差し指と中指を絡ませて『バリアのポーズ』をした。

U治は時と場所をわきまえることをもう少し学ぶべきだと、この頃からボクは思っていた。

S夫はすっかりヘソを曲げ、さらに口を尖らせた。

「お前が投げたからいけないんだろー」

S夫の目は少しなみだ目になっている。ここまで興奮しているS夫を見たことはない。よほどこのカラーボールがお気に入りだったのか、あるいは毒キノコが怖かったのか。

「触るんじゃないよ！」

4人ともその場に一瞬凍りついた。雷にでも打たれたかのように全身に緊張感が走り、髪の毛が逆立つ感覚。ヤマンバが僕らのすぐ後ろにきて、スコップを片手にボクらをにらんでいた。

「うわあ——！」

最初に駆け出したのは、G朗だったか？それともU治だったか。S夫は驚いた拍子にボールを落としてしまいそれを拾うのに手間取った。ボクは先に走り出したG朗とU治を目で追いながら、S夫がボールを拾うのを待ってから、駆け出した。そのうち2番目を走っていたU治が木の根元に足を引っ掛けて、見事に転倒した。

「いってーっ！」

見ると右のひざがすりむけて滴るほどに血が流れていた。U治は目に涙をいっぱい浮かべ、必死にこらえている。ボクらはいつも、無茶なことをしているので、ヒザをすりむくなんて、日常茶飯事だったが、この傷はヤバかった。

血が止まらない。

「これ、はやく消毒したほうがいいよ」

G朗が心配そうにUを覗き込む。

「バチが当たったんだよ」

S夫がボソツという。

「そんな、ちょっとからかっただけじゃん」

「そうじゃないよ」

ボクのことをS夫がさえぎる。

「そのことじゃないよ……」

みんなすっかり意気消沈してしまった。みんなわかっている。桜堂から「盗んだガムテープ」そしてそれで毛虫を「大量虐殺」したこと。

罰が当たって当然である。

「今日は、もう、帰ろう」

U治はもう涙をこらえられない状態だった。U治の方を抱えて起き上がらせると水道の所まで行って、とりあえず傷口を洗い流した。公園の水道は水を飲む蛇口が上向きになって、細く水がでるところと、手や足を洗えるように蛇口の先が回転する普通の水道がついている。U治は普通の蛇口のところにしゃがみこんでヒザを曲げ、ヒザ小僧を流水にあてた。

「いっ痛ううう」

U治は必死にこらえている。ヒザは泥がこびりついている。きれいに洗い流しておかないと化膿してしまう。きっと明日の朝には赤チンまみれになっているだろう。ふと、傷を洗い流しているU治の背中に蠢くものが目に入った。

「あっ！」

思わずボクは大きな声を出し、飛びよけた。ボクの視線の先には、毛虫が一匹、U治の背中を首筋めがけて這っているところだった。

「U治、動くなよ」

G朗が、U治の腕をつかむ。S夫はすっかり怯えている様子だ——そういえばこういうシーンをよくテレビ映画で見たな。それはたいていサソリか毒グモだが。

「なに？」

U治は『かたち鬼（凍り鬼）』の時のように、見事に凍りついた。

「今取るから」

ボクは小枝を拾ってU治の背中を這う毛虫を払いのけた。毛虫はうねうねと地面をのた打ち回っている。U治は悲鳴を上げた。

「ぎいいいいいい、あああああ……」

それはあのマンガのキャラクターをまねた擬音ではなく、彼の本気の悲鳴だった。ボクらはもはや、想像せざるを得ない……これは毛虫の復讐なのかと。地面に落ちた毛虫は、まっすぐにボクに向かって這ってくる。ボクははじめて虫の視線を感じて背筋に震えを覚えた。

怖い

そのとき突然、音楽が鳴り出した。

ぐあーん がーが ぐあーん ぐあー があがー ぐあーん がー ……

『夕焼け小焼け』——この地域で5時半を知らせる時報として、公園などに設置してある緊急放送用のスピーカーからこの音楽が流れるのである。初夏だというのに、ボクらは4人とも鳥肌を立てていた。

「あせったー、もう帰ろー」

G朗だったか、U治だったか——S夫は口を真一文字に結んだままだった——もう尖っていない。ボクらは毛虫をそのままに家路につくことにした。

もう……殺すのは怖かった。

そしてその日の夜、ボクは生まれてはじめて『恐怖』を知ることとなる。ボクは、その日、家に帰ってから布団に入るまでのことを、ほとんど覚えていない。

闇からくるもの

怖いテレビや映画を見たとき、あの頃の私は決まって眠れなくなる。一人で夜、トイレに行くことができない。特にそれが闇に潜む怪物や幽霊の話であればなおさらである。

『東海道四谷怪談』私は今でもあれを好きにはなれない——怖いのだ。

欲に目がくらみ、女を裏切る主人公。彼は邪魔になったヒロインを知り合いに頼んで薬を与え毒殺する。主人公によって謀殺されたヒロインは怨霊となって主人公を追い詰めていく。ついに主人公は気が触れてしまい……

扉を開く、振り返る、主人公の死角から次々と襲い掛かる幽霊の演出に、あの頃の私はトイレにいけなくなるほど恐怖した。今でも私はシャワーを浴びるとき、ふと、背中にいやな気配を感じることもある。

そしてあの日の夜も、ボクは……

ボクは布団に入ってもなかなか寝付けないでいた。隣からは弟の寝息が聞こえる。両親や弟はもうすてに眠ってしまっているようだ。外では風に吹かれてときより風鈴の音が響いていた。ボクは目を瞑っているのがつらくなり、ただ、ぼんやり天井を眺めていた。我が家では完全に電気を消さない。豆電球のオレンジ色のやわらかい光が、天井から降り注ぎ、あたりを薄暗く照らしている。ふと、なにか薄明かりの中であごめくものを見たような気がした。

なんだろう？

天井のちょうど自分の真上。顔の位置よりも首から胸のあたりになるか？よく見ると、それは小さなシミのようで、木目の模様のようなようで、或いは、虫のようで……

虫？蜘蛛かハエかゴキブリか？

或いは……毛虫？

公園でU治の背中から払い落としたあの毛虫。あれはボクをめがけて這っていた。それは間違いない。だいたい、毛虫に目があるのか？ボクだと認識できるのか。単なる偶然、たまたま進行方向にボクがいただけじゃないか？たまたま。そう、たまたま、U治の背中に、何かの拍子で木から落ちていてきたのだろう。

ただの偶然に決まっている。

天井の板に今までまったく気にならなかった小さな模様か或いはシミのようなもの。いつからあったのか、全くわからないけど、でも、ボクは考えてしまった。あの公園で振り落とした毛虫が、ここまで追いかけてきたのではないか？という疑問――恐怖を。

もはやボクにはそのシミを無視することはできなくなってしまっている。瞬きをするたびに、少しだけボクの顔に向かって天井を移動しているように思えてしまう。

そんなはずはないのに……

いや、実際少しずつ動いている――いや、それは錯覚だ。

でも、ほら、こっちの木目と比べて、もう少し下のほうに、最初は見つけたのではなかったか？

――いや、ちがう。そんなはっきりとは覚えてないし、ちゃんと位置を確認したりしてない。

今はその位置を正確に確認している。

大丈夫動いていない。

動いていないが、少しだけ、大きくなってやしないか？

うん、そんな気がする。

――いや、そんなはずはない。

だって、大きさを比べるようなものは周りにはないから、それもただの錯覚さ。

ほら、こーして手を伸ばして、自分の指の大きさと比べてみればわかる。

うん、時間がたったらもう一度やってみればいい。

きっと大きさはかわっていないさ。

ボクは冷静だった。ちゃんと大きさが計れるように、自分の指を天井に突きつけて、絵を描くときに画家が筆や指で対象物の大きさを測るようにすることで目の前で起きている『錯覚』を説明しようとしていた。

――大丈夫、ボクは冷静だし、ちっとも怖くなんかない。

幽霊の正体なんて、だいたいそんなもの。UFOだって、ほとんど錯覚なのだから。

目を閉じていたのは、多分1分にもみたなかったに違いない。だが、ボクにとっては、1分以上に感じだし、この異常な事態を検証をするのには十分過ぎる時間だと思われた。ボクはなんの恐れもなく、目を開けて、あの忌々しい模様の大きさを測ろうとした。だが、そこに、さっきまであったはずの模様はなくなっていた。まるで部屋の中の闇に溶け込んでしまったかのように、姿を消してしまっていた！

ボクは、ボクは、ボクは『恐怖』した。

どんなに目を凝らしてみても、どこを探してみても、それはもう『そこ』にはなかった。 さっきまで、どこかぼんやりとしていたけど、それでも確かにそれは『そこ』にあった。

『あったもの』が『なくなった』のか？ 『あったもの』が『見えなくなった』のか？

『なかったもの』を『見ていた』のか？ 『見えないもの』が『見えていた』のか？

『なかったものが見えていた』と『あったものが見えなくなった』では、現時点においては同じ状況ではあるが、まったく違う『将来の予測』が成り立つ。

もし、『あったものが見えなくなった』のであれば、それはボクにみえないところに存在し、つまりはボクのすべての死角にそれは潜んでいる可能性があるということである。『なかったものを見ていた』のであれば、それは『なかった』のだから、そもそも存在しないものということだ。

何故それが見えたか？はいくらでも理由がつけられるし、極端、もう見たくなければ、目を瞑り、寝てしまえばいい。しかし、『あったものが見えなくなった』というのは、ボクの視界の及ばない遠くへ行ってしまい、時間軸では存在するが、位置的には存在しない状態であればいい。

が、しかし.....それを今、『確認』することはできない

解決をしてくれるのは、このまま朝までそれを見ることができないという、観測による確認。『見えない』ということは『ここにはない』ということを示すしかない。

だけど.....だけど、だけど

もし、ボクの死角にそれが潜んでいるのなら、ボクはどうすればいい？

そんなことを考えているうちに、ボクの五感の感度は最高値にまで高められていった。

些細な音、台所で旧式の冷蔵庫がぶーん、ぶーんと唸る音

パッキンが緩んだ水道から水滴が滴り落ちる音

目覚まし時計が時を刻む音

カチ、カチ、カチ、カチ.....チカ、チカ、チカ、チカ.....

あたりには『シーーン』という空気が張り詰めた音

やがてそれは『キーン』と音量があがってくる

どんなに耳をすましても、どんなに目を凝らしても、今はその存在を確認することはできない。あの黒いシミのような、模様のような、あれはなんだったのだろうか？ボクは、言い知れぬ恐怖を感じながらも、それがなんであるかを確かめずにはいられなくなっていた。

ボクは観測を始めた。

時計をみる。

1 1時20分—異常なし

1 1時30分—外で猫の鳴き声？

1 1時36分—誰かが寝返りをした。たぶん父だ

1 1時45分—遠くから電車の走る音

1 1時51分—もうすぐ12時。こんな遅くまで起きているなんて、親にばれたら怒られるな

1 1時58分—12時になったかとおもったけど、12時になったらもう寝よう。
眠れるなら

ボクは頭の中で、120秒をイメージした。きっとそんなことを数えているうちに寝てしまうだろう。だって、いままで、成功したことはないから……しかし、期待に反して、ボクの意識ははっきりとしたままだった。しかたなくボクは長い針と短い針が天井をさす場所を見上げた。

『それ』は一瞬ボクの視界に入った気がした

『それ』はボクの足元へ落ちてき……ように見えた

次の瞬間、ボクは頭のとっぺんから、つま先まで、電気が走るような衝撃をうけた。ボクの右足の、スネのあたりに何か動いている！

ああ、そうなのだ！

ボクは『あったものを見ていた』のだった！

ボクは正しかった！

ボクは間違っていなかった！

ボクは……ボクは、ボクは！

ど・う・す・れ・ば・い・い・の？

あれは……あれは……『あのとき』『あそこに』『あった』

散文的ではあるが、それは確実な一つの結論『存在』が観測され『存在』が証明されたわけだ。ひとつの問題は解決された。しかし、それは期待した結果ではなかったので、ボクは次の問題を解決しなければならない。

第1の問題——あれは、なんだ？

第2の問題——で、ボクはどうすればいい？

そしてボクの優先順位は、第2の問題だ。つまり、どうすればいいか？どうすれば被害を受けずにすむか？どうすれば逃げられるか？ということである。

あれがなんでもかまわない。まず、大事なことは、ボクのスネの上——ありがたいことにあれが降ってきたのは、素足ではなく、寝巻きと薄手のタオルケットの上であり、たとえあれが、『よくないもの』であっても、ボクはタオルケットを跳ね除けることで、今の状況からは脱することができる。

しかし、同時に、あれが何であるか？を確認する術がなくなる可能性を含んでいる。あれは逃げてしまうかもしれない、そして、どこかボクの死角に潜み、結局ボクは眠れない夜を迎えることとなる。ボクは、第2の問題を解決するためには、やはり第1の問題を解決しなければならないということを思い知らされた。あれをこの目でみて「何であるか」を確認しなければならない。ボクは恐る恐る、顔を起こして、あれが降ってきたあたりを覗き込もうとした、慎重に、足が動かないように、あれに気取られないように……

そーっと、そーっと。

豆電球の薄明かりでは、いささか心もとないが、それでも暗闇よりかは、はるかにましである。オレンジ色のぼんやりとした明かりに照らされ、暗がりになれたボクの目になら、あれは見えるはずだ。しかし、どんなに目を凝らしても、そこには何も無い。それらしき姿が見えないのだ。タオルケットは白地に藤の花の模様が描かれており、黒いものが乗っかっていれば、こんな薄明かりの中でも十分に識別できるはずだと思った。

にもかかわらず、『あれ』は『そこには居なかった』。だが、しかし、そうなのだ。今、そこに居ないというだけで、正しくは「そこに居たはず」という状況。既にそこから動き出し、どこか『ボクの死角』に逃げ失せたのか。いや、そもそも『あれ』は、一度はボクの視界から消えて見せて、そして時計をみた一瞬後にどこからともなく現れて、ボクの足元に降ってきたというのは、間違いがない。

ボタン！というよりはポタン！という感じが

――重さはさほどないものである。

ゴキか？

――ゴキブリはイヤだけど、まあ、やつなら墮ちたようにみえてボクの死角で飛んだのかもしれない。そういう経験がないわけではないが、それはそれで、あまり気持ちのいいものではない。まあ、それなら、別に噛み付くわけでも刺すわけでもない、ただ、ゴソゴソとして気持ちが悪いだけだ。

時計に目をやると、時間はたったの2分しか過ぎていなかった。ボクには少なくとも5分はたっており、感覚的には7～8分だったので、5分前後だと冷静な予測を立てていた。

ボクは決心した。

ボクはそれがゴキブリだと決め付け、タオルケットを足で思い切り上に向かって蹴飛ばし、身体を起き上がらせて、あたりを見回した。そこには横で寝ている弟や妹、父と母の姿があるだけで、時計の音以外は何もしない。静寂した闇の水面からボクの上半身だけが浮き上がり、ボクを中心に波紋となってざわめきが広がっていった。そのざわめきに気づくいたのか、母が僕に向かって寝返りをうち「まだ起きているの？もう寝なさい」と囁いてくれた。

「うん……なんか、ゴキブリがいたような気がしたから……」

「……寝なさい」

母は再びボクの反対側に寝返りをうって、眠ってしまった。でも、ボクには少しだけ安心感もどった。独りじゃない。先ほどまで静寂の中で「キーン」と聞こえていた音は静まり返り、時計の音もどこか遠くで聞こえている。

……もう寝よう。あれは、きっとゴキブリだったに違いない。

ゴキブリで、よかった。

ボクは藤模様のタオルケットを頭から被り、眠りにつくことにした――もう天井を見上げるのはイヤだった。

たぶん『誰もがそうしたに違いない』とワタシは確信している。

結局ボクは、藤模様のタオルケットに包まって息苦しい一晩を過ごした。翌朝、今にも雨が降り出しそうな空を恨めしそうに見上げながら、学校へ行くことになった。それにしても――これから毎日がこんなイヤな感じなのか？あの桜堂の前を通り過ぎるたびに、あの気のいい老夫婦のしわしわの笑顔をみるたびに、あの細く垂れ下がった目の奥に、決して笑っていない瞳を感じなければならないのか？

教室に入ると、U治が足に包帯を巻いているのに気づく。よっぽど傷の具合が悪いのだろうか？

「どう？」

「うん、大丈夫・・・なんかばい菌が入ったみたいで、ゲロゲロになってるけど」

どうやらさすがのU治もおどけてみせるだけの余裕はないようだ。気がつくやG朗やS夫も集まっていた。

「なにもなかった？」

G朗が意外なことをボクにたずねて来た

「え？」

「S夫と朝来るとき話したんだけど、オレ、あれから家に帰るのに2回くらい車に引かれそうになったよ。S夫も帰り道に霊柩車をみたって」

あのころボクらのなかでは霊柩車は不吉な存在で、それをみたら親指を隠さないと、身内に不幸が訪れると本気で信じていた。あんなことがあった日に霊柩車を見るというのは、それは、それは不吉なことである。

「お前ちゃんと、親指かくしたのかよ」

U治がS夫にきく。

「それがさあ、あまりに急だったんで、隠せなかったんだよ」

S夫はうかない表情をしていた。

「これって、やっぱり昨日の・・・」

G朗がU治の足の包帯を見ながらつぶやいた。

「そんなのただの偶然だよ！だってオレ、なにもなかったし・・・」

『ボクは、嘘をついた』

授業が始まると、ボクは、ボクらはとても陰鬱な気分になっていた。放課後、ボクらは学校の裏に焼却炉が気になって様子を見に行っただろうか？あのガムテープは全部燃やされたのだろうか？焼却炉は白い煙を上げている。周りにはだれもいない。焼却炉のわきに、途中まで使ったガムテープを見たときに、言い知れぬ不安を覚えた。

「なあ、あれ、やばくないか？」

G朗は小さな声で言いながらみんなの表情を伺っている。

「もしかしたら、ばれるかもしれないよ」

S夫は小さな声を震わせながら、すっかり怯えている様子だった。

「ねえ、今なら誰もいないし、あれ、もってかえってどっかに隠しちゃおうよ」

U治はあのことが親にばれるのはとても恐れていた。U治の親はPTAの役員である。その息子が学校近くの文房具屋の倉庫からガムテープを盗み出したことがわかれば、それは想像できないほど恐ろしいことになるだろう。ボクらの行動は早かった。ガムテープをそれぞれひとつずつもち、ランドセルに無理やり入れると、一目散に学校の校門まで走っていった。もはやボクらのうしろめたさは、くるところまできていた。みんなが別れる十字路でボクらは立ち止まり、呼吸を整えた。

「じゃあ、うまく、やれよ」とG朗の言葉でみんな別れた。

ボクは帰りみち、車に注意しながら、そして霊柩車がいつ通っても大丈夫なように親指を手の平に握りこみながら、家路についた。あれを隠すところはどこにでもある。ボクの家は工場の寮で、大人が知らない死角には事欠かない。ボクは一番の隠し場所とおもわれる工場の廃材置き場へと入っていった。ちょっとした空き地で焼却炉や使わなくなった壊れた重機の部品などが無造作においてあり、雑草が膝あたりまで生い茂っていた。ボクはここで宝物を見つけては、大人たちに見つからないように隠すことに成功していたし、ここはボクがいて当たり前の場所。すっかり遊び場になっており、いくつかの注意事項――厄介ごとを起さなければ注意されることはなかった。

でも、その日、いつもなら気にならない風景がボクには特別なことに見えてしまった。雑草の中に足を踏み入れた瞬間、ボクの足に絡みつ়雑草の感触は、毛虫の存在を容易に想像させ、ボクの注意は必然最大限に高められた。この季節、雑草の中に毛虫を目にすることは普通だし、毛虫が食べた葉のあとを見つけるのはさらに簡単なことである。1分、いや30秒も立たないうちに、ボクはそれをみつけてしまった。

だめだ、ここもやられている――ボクはすっかり毛虫に自分の居場所を食べあらされている気分になっていた。

帰ろう。

家の中にもいくらでも隠し場所はある。ボクは後ろめたい気持ちと、それを象徴するガムテープを自分の家に持ち込んでしまった。今にして思えば、ガムテープをあの場所に投げ捨てるだけでよかったと思う。けどあの日のボクには……いや、その前の日から、ボクには選択肢が狭められていたのだ。あの日のボクに、ほかに何ができたというのか？

ボクはすでに扉を開けてしまっているのだから……

学校から帰っても、そこには誰いない。ボクの父はボクの足元で働いている。この家は父が働く工場と一体になっている。4階建てのアパートの最上階だ。母は地方公務員で夕方6時くらいに帰宅する。父も母も変えてくる時間は同じくらいで、母は帰ってくるとすぐに夕飯の支度をする。

ボクと弟と妹は夕方の子供向けのアニメを見ながら夕飯を待つ。およそその間に会話は無い。食事中もテレビはつけっぱなしで、どちらかという会話はなく、母が「野菜も食べなさい」とか「余所見をしているとこぼすわよ」というくらいである。誰に聞かせるわけでもなく、母は、「今日は御肉が安かった」とか、「いいサカナが売ってなかった」とか、そんな話をするけど、たまに父が「ああ」とか言うくらいで、母もこれといって返事を期待しているわけでもない。それは、この時代、どこの家庭でもごく普通なあり方だったと思うし、「今日ね、こんなことがあったんだよ」みたいなテレビドラマに出てくるような会話は、あっても月に3回くらいのものであった。しかし、今日は少しばかり違っていた。

「今日の買い物の帰りにいつもの通りを通ってきたけど、毛虫がいっぱいたわよ、きもちわるい。自転車で踏んづけちゃったわよ」

ボクは、ドキッとした――また毛虫なのか！

「殺虫剤まかないとあれに、刺されるとかゆくなったりするんでしょう？学校は大丈夫？」

ボクはテレビをみて聞こえないふりをしようと思ったけど、弟は本当にテレビに夢中で、話をきいていないようだったし、無視するのも変だと思い「裏にはでるらしいけど、行くこと無いから……」とテレビの方を見ながら、できるだけ自然に応えようとした。が、どうやら失敗したのかもしれない。

「え？」

母はボクの顔をまじまじと見ている。ボクは必死で考えた。なんか変なこと言ってしまったのか……それとも仕草か。

「うん？」

ボクは結局、変に取り繕うよりも、知らない顔を決め付けるほうがいいと思い、何故『え？』なのかわからない『うん？』を返したつもりだった。

母からすれば、感心がなければ『うん？』あっても『うん』か『知らない』か『ううん』か……まともな会話が帰ってくることを予測してなかったか、テレビの音でボクの返事が聞き取れなかったのだろうか？

「気をつけなさいよ、刺されると痛いんだから」

「うん」

ボクはテレビをみていたけど、その内容は全く頭にはいっていなかった。父は夕刊を眺めながら、その会話にはまったく感心がないようだったが、「あー、そういえば、この辺でも毛虫をよくみるなあ」

ボクは必死で聞こえないふりをした――いったいどうなってるんだ！

ボクは、ご飯を口にかき込んで、「おかわり」と茶碗を母に差し出すことで平静を装おうとした。が、しかし、ボクはたぶん、始めてこのタイミングでお椀を手からすべり落としてしまった。

ガシャン！

お椀は、割れなかったけど、空気を壊すには十分な音だった。

「なによー？よそ見してるからでしょう？」

母に叱られた。

父はボクをにらんでいる。

「テレビ消しなさい」

「えー。もー。うう」

弟は兄貴がいけないのだという抗議のまなざしでボクをにらみつけた。

ボクは……ボクは……本当に泣き出してしまいそうになるのを必死にこらえて、こらえて『ほら！』と母がご飯をいれて差し出したお椀を受取り、黙々と食事を続けた。

本当は食べたくなんかなかった。1膳しか食べないで、どうしたの？と聞かれるのがイヤだったただけなのに……今にして思えば、明らかにボクの様子がおかしいと、母は気づくいていたに違いない。しかし、あの時のボクは、一人ぼっちだった。

そして、ボクはただ、ただ、怯えるだけだった。

これほどまでに最悪な日はないと思った。実際それは間違いで、このあとにはいくらでも悪いことはおきている。人生40年も生きていれば当たり前だ。でも、小学校5年生のボクには、これほどまで悪いことが続く日はなかった。気まずいままに、夕飯をすませ、テレビをみながらもボクはガムテープのことが気になって仕方がなかった。机の引き出しの中を親が見るようなことは、年に何度もあることではないし、あったからといって、それをどうした？と問い詰められることもないように思えた。

だけど今日は特別な日――最悪だ。

そういうことが起きてもおかしくない。でもだからといって、今更隠し場所をかえることもで

きない。なんでもっと他の場所にしなかったのだろう。そもそもあんなところにやつが、毛虫がいなければ……

ボクの家にはお風呂はなかった。銭湯に行くか、会社の入浴施設を使うか。このローテーションに関しては、特に法則があったわけではなかったと思う。そうだ、このことは父が健在のうちに聞いておこう。

ボクは工場の入浴施設が嫌いだった。銭湯に行けば友達に会うこともあるし、コーヒー牛乳が飲める。工場のお風呂はどこか不気味だった。別に工場のお風呂で何かを見たり、聴いたりしたことはないけど、頭を洗っているとき、背後に何かの気配を感じて怖くなることは、銭湯ではなかった。

でも、銭湯への行き帰り、不気味な建物の前を通るのはイヤだった。工場の入浴所に行くためには、工場の敷地内を歩いて奥のほうに行くのだが、誰もいなくなった無機質な工場の敷地内には、何か得体の知れないものが、闇にまぎれて徘徊しているにちがいないと、ボクはそんな風に考えていた。

でなけりゃ、なんで、もり塩なんてしておくんだ。

でなけりゃ。なんで。稲荷なんて祭っているんだ。

この日、ボクはお風呂に行きたいと思わなかった。誰が好んで怖いと思うところに、しかもこんな最悪の日に行くものか！しかし、ボクがどう思おうと、それはボクの自由になることではなかった。家族でお風呂に入ることを拒否したことは何度かあったけど、それは低学年の頃の話——流石に5年生になってからは、そんな態度を取ったことがなかった。

ボクはなるべく暗がりには目をくれずに下を向きながらお風呂へ向かった。こんな日は、それこそ、変なものを見てしまうかもしれない。何かのテレビ番組——夏によくやる心霊現象の特番で、霊能者が言っていた。世の中には幽霊を見やすい人とそうでない人がいて、だいたい子供の頃に一度みたら、2度、3度と見ることになるけど、それがない人は見ることはない。

ボクは霊能者の言うことをまるまる信じるような子供ではなかった。が、しかし彼らが言う、ボクにとって都合のいいこと……もし、幽霊に付きまといられたら、ちゃんと供養をすれば大丈夫とか、お寺に相談すれば大丈夫とか、金縛りに会いそうになったら、何でもいいから念仏を唱えろと、怖いものを見ないですむとか、そういうことは興味があった。

だからボクも小学校を卒業するまでに幽霊を見なければ、霊体験をすることはないと信じていた。そして、幽霊に出くわさないためには、幽霊が出そうなところに行かなければいいし、見なければいい。だから、なんか不安になるときは、ボクは怖いと思う方向は見ないようにしていた。誰にも気づくかれないようにG朗やU治、特にS夫には絶対に気づかれないように細心の注意を払っていた。

S夫は、あれで、結構意地が悪いなのだ。

しかし、この日は、問題は幽霊ではなかったのだ。幽霊を怖がって、下を向きながら歩いたばかりに、前を向いていれば、気づかなかったはずの踏み潰された毛虫の姿を見てしまった。

ボクはもう、すっかり毛虫に取り付かれてしまっていた。

ボクは身震いをさせながら、工場の敷地内を小走りで進み、御風呂場にたどり着いた。いつもと変わらない風景。お風呂の窓には大きな蛾がべったりとくっ付いている。当たり前に風景にもかかわらず、ボクは奴らの視線を感じないわけにはいかなかった。

蟲たちの視線とざわめき――恐怖の夜の始まりだ。

夜になれば、電気を消して寝なければならない。

今日は・なんか・怖いから・嫌な・感じが・するから.....

だから電気をつけたままで、テレビをつけたままで——子供の頃は『そういうことができるようになることが大人になることだ』と思っていた。子供が見ている大人の自由、特権というのは、とても些細でささやかなことなのだ。

夜はいつものように訪れて、いつものように更けていく。絶対的な時間的観念はこの際問題ではない。電気を消し、静まり返ったこの空間——そこでは1分が10分を感じられ時間の流れが歪んでしまう。そして暗闇の中に息を潜めるしかない孤独。母の寝息も、弟の蚊に刺された跡を掻き毟る音も、腰痛に悩む父の湿布の匂いも——すべてボクとは関係のない世界——すぐ手に届く距離なのに、すぐ聞こえる距離なのに、匂いがする距離なのに、ボクだけ別の時間軸の中に閉じ込められているような感覚.....

昨日は藤模様のタオルケットを頭から被って寝ることができた。ささやかな抵抗だけど、それしかなかった。タオルケットの中は、ボクの体温で暖められ、モワツとした湿気に包まれていた。やや息苦しいが、昨日の夜体験したことを、二日も続けて味会うつもりはないし、実際、この方法で対処できたのだから。

時計の音はタオルケット越しにかなり鈍くなっているし、冷蔵庫の唸る音も、タオルケットが吸収し、遮断してくれている。大丈夫、ここなら安全だ。ボクはおよそ1時間——もしかしたら5分～10分なのかもしれないが今となっては確認する術はない。

ボクは、闇に耐え、恐怖に耐えていた

しかしボクの心は、ここがどんなに安全な場所だとわかっていても、どこかザラザラとした、言い知れぬ不安に覆われていた。

こんなものじゃない、だって、怖い映画では、これで大丈夫だって思った時が一番危ないじゃないか！

ボクの頭の中では、恐怖に耐えかねて、タオルケットから様子を伺おうと顔を出した瞬間に、天井からボクの顔をめがけて落ちてくる黒い小さな物体——それはボクの顔に近づくとつれて、輪郭がはっきりし、間違いなく毛虫だとわかったときには、ボクは避けきれずにボクのおでこのあたりに落ちてくることを何度も想像した。

そしてそのイメージは見る見るうちにボクの中で膨れ上がり、ボクは毛虫が額に一度落ちて、

跳ね上がることもなく、ペタッと額にへばりつき、ボクの鼻に向かって這い始める感覚を繰り返し再現していた。

何度も何度も……何回も何回も……

恐怖の妄想を繰り返すうちに、ボクは額から鼻にかけてむずがゆい感覚に襲われ始め、本当に毛虫がボクの額の上を這い回っているという錯覚を確かに認識していた。

……ダメだ！考えちゃダメだ！

ボクは両手を顔にうずめ、このいまましい想像、幻覚、錯覚を振り払おうと顔をこすり上げた。そこには当然に何もありません——でも確かめずにはいられない。

何度も何度も……何回も何回も……

やがて顔中のむず痒さがやわらいでくる。しかし『それ』は、消えたわけではない。ボクは『それ』がタオルケットの上を、頭から足のほうへ移動するさまを想像していた。無数の『それ』は次から次へと天井からタオルケットめがけて……

『ポタ、ポタ、ポタ』と落ちていき、タオルケットと布団の隙間をさがして上に下に徘徊する。毛虫は時々頭を少しだけもたげて、お互いの位置を確認しあうようなしぐさをしている。まるで無機質なコミュニケーションを取っているようだ。

ソッチ ハ ドウダ？

コッチ ハ ダメダ

アタマ ノ ホウハ ガード ガ カタイ

アシ ノ ホウハ スキマ ガ アルカ？

ワカッタ カクニンスル

ボクの全身はすっかり鳥肌が立ち、体中の毛穴が開いては閉じ、汗が噴出してきた。その汗はやがて重力に耐え切れず、ボクの肌の上を滑り落ちていく。その感覚はまるで、ヤツらがボクの皮膚の上を徘徊しているような感覚。

ボクはもう、限界だった。

ボクが恐怖に怯えれば怯えるほどに、恐怖に対する感覚は敏感になり、ボクは全身で恐怖を感じていた。身を震わせながら、自分の肌を滑り落ちる汗にも、もはや飛び上がるような状態である。『いけない』と思いながらも体が反応して、右足がタオルケットの足元か出てしまった！

ヤバい……ヤバい……ヤバい……

ボクは意識を全て右足に集中し、できるだけソーツと、そしてできるだけ早く、タオルケットの中にしまおうと試みた。が、それは無駄だった。ボクのアシはすっかり汗ばんでしまい、汗でびしょびしょになった足はタオルケットをそのまま捲り上げてしまうのである。

イヤだ、イヤだ、イヤだ！

ヤツらはのろまだ！

のろまだけど確実に少しずつ、少しずつ、ボクの足元へ向かっていく。ボクには毛虫の目が無機質な表情から真っ赤に染め上がり、砂漠を走る戦車のように失踪する様を思い浮かべる。思い浮かべながらもボクはそれを否定し続けた。

ちがう！毛虫に目なんてあるものか！毛虫に目はない！毛虫に目はない！

ミセテ ヤロウ

ミセテ ヤロウ

ミセテ ヤロウ

それは音声ではなくて、ボクの意識の中に直接働きかけてくる声というよりは振動、或いは波動のようなもので、耳の奥というよりもアタマの天辺から骨を伝わってくるような『響き』である。

見ない、見ない、見ない

ボクはアシをばたばたさせながら、なんとかタオルケットの中に右足を入れようと必死になった。そしてそれは成功した。右足でまくられたタオルケットを左足の親指に引っ掛けて思いっきり下のほうへ足を伸ばした。必然——それは、そう必然。ボクのアタマは、タオルケットから顔を出し、力いっぱいつぶっていたボクの両目は、あまりの急な出来事に、思わず目を開けてしまった。

ボクは見た……

ボクは見たのだ……

ボクは見てしまったのだ……

天井の闇——『闇』なんてあるはずがない
そこには天井があるはずで、闇があるはずはない

そこには天井があるはずで、『動いて』なんかいるはずがない
でもなにかが動いている

わさわさと

わさわさと

ボクは慌てて両手でタオルケットを掴み、頭から被り直そうとした。でも、ボクが掴んだものは——

ああ、そう、そうなのだ。藤模様のタオルケットの端はタオル生地ふわっとした感触をつかむはずの手は、なにかすごくいやな感触で覆われていた。

ぐにゅじゅわあ！けっ けっ けえー！

ボクの全身は、わさわさと……わさわとざわめきたち、そのざわめきに呼応するように、天井に無数の赤い光が点滅して見えた。

ヤツら……ボクを……見てるんだ……

こんなの現実じゃない！悪い夢に決まっている！そう、夢だから、夢だから！

ボクは父や母、弟や妹が寝ているはずの場所に視線を移した。そこにはタオルケットから…
…『頭？』がでている。横たわる……『人の姿？』が確かにあった。しかし、髪の毛に見えたそれは、わさわさと蠢いていたし、タオルケットの中身も人の形の塊ではあるが、やはり中で何かが蠢いている。

ほらみる！こんな現実離れした世界はありやしない。これは悪い夢なのだから。しかし、現実か夢かという問題は事態の解決策とはならない。

現に、ボクは、怖いのだ

ボクは自分がイヤだと思うことが、そのままこの世界に現れていることに気づき始めていた。でも、だからといって、この恐怖から逃れるすべはない。ひとつの恐怖は次の恐怖を呼び込む。もはや恐怖の連鎖はとめることができない。ボクはタオルケットにまとわりつき、或いは天井からこちらをじっと見ているヤツらが、ボクのからだを覆いつくし、パジャマのズボンの裾にある隙間、腕の袖の隙間、上着やズボンのボタンを留めているところのあいだから、ボクの肌をめがけてじわじわと迫ってくる様子を想像しそうになって、頭を左右に振った。

ダメだ、ダメだ、こんなことじゃ……

なにか、毛虫を撃退する手段を考えなきゃ……

毛虫を撃退する？

そうだ、ガムテープ！

ボクがそのことを思いついたとき、ヤツらはいっせいにざわめきたった。

ヤメロー

ヤメロー

ヤメロー

クルシィー

クルシィー

クルシィー

ヤツらのざわめきはひとつの声になっていった。ボクは机の引き出しの置くからガムテープを取り出そうとした。ボクは強い気持ちで念じた。『ここにガムテープは絶対にある！なくなってなんかいないし、引き出しにカギなんか掛かってない！』

ボクはすばやく布団から起き上がると机に向かって歩き出した。足元に蠢くものを踏みつけるイヤな感触を足の裏に感じながら、机の引き出しに手をかけた。『絶対に開く！絶対にある！』

ボクは力いっぱい引き出しを引っ張った。

ガシャガシャガシャ！

勢いあまって机の上に散乱していた文房具が崩れ落ちる。

ボクは机の引き出しを開けることに成功し、そして、あの忌々しいガムテープ――焼却されていたかもしれない、もしかしたら工場に捨ててきたかもしれないガムテープは、確かに引き出しの中にあった。ボクが暗がりの中でその存在を確認できたのは、ガムテープが禍々しい青白い光を放っていたからかもしれないが、今でははっきりと思い出すことができない。

『これで！』ボクはガムテープを手に取り、テープを引き伸ばした。

ビリビリビリ

イヤな音だ。だけどこいつがあれば……『これで立場は逆転だ！』

ヤメロー

ヤメロー

ヤメロー

蟲のざわめきは一段と大きくなった。ボクは引き伸ばしたガムテープを両手に構え、それを床や壁や天井に向けた。『今度はこっちの番だ！』

さながらドラキュラに十字架を向ける姿に似ていたかもしれない。或いは刑事ドラマでダイナマイトにライターを近づけながら警官を威嚇する逃走犯か？ボクは森の獣たちがたいまつを恐れるように、毛虫もこのガムテープを恐れているのだと思った。一瞬、ヤツらのざわめきが停止した。

静止……？制止……？正視……？静思……？

静かに、身を制し、じっくり見ながら、考えている。ワサワサとしていた『それ』は一瞬にしてひとつの集合体に変貌したかのようだった。

ボクはヤバイと思った。

そう、ボクは想像してしまっていた。ヤツらがなにがしらの手段で互いのコミュニケーションをとり、何をすべきかを理解し、その行動の準備をするためにこちらをじっくりと観察し、一気にその力を解放する瞬間を待っていることを……

あっ！

考えちゃいけない、想像しちゃいけない、感じちゃいけないんだ。

恐怖を……感じちゃ……考えちゃ……想像しちゃ……い・け・な・い

ボクは思わず自分のうかつさに悲鳴をあげていた。

ゾワゾワゾワ

ヤツらは恐ろしいほどの速さでボクの口めがけて跳躍あるいは飛翔あるいは猛進してきたのである。床に蠢いていた「それ」は、身をくねらせながら小さく飛び上がり、さらにその上に次の蟲がのしかかって飛び上がる……これを繰り返すことで蟲の波がボクの口めがけて跳躍してきた。天井にへばりついていたやつらは身体を振り子のように振り出すことでボクの口めがけて飛翔した。いつの間にかボクの身体にしがみついていたそれは、ボクの口めがけて恐ろしい速さで猛進してきた。

口を手で押さえること、身体を動かしてよけること、口を閉じること。すべての行動が一瞬、ほんの一瞬遅れたのだ。気がつけば、ボクの顔はワサワサしていたし、ボクの口の中はグシャグシャしていたし、ボクの体中は裸で冬の芝生の上に寝転んだ時のようなザワザワした不快感に覆われていた。

ボクは、恐怖に、ただ、じっと、耐えるしか、なかったのだ。

『いやだ、いやだ、いやだあああ！』ボクの心はついに壊れた。

とにかく、ヤツらを止めなければ。ボクはボクにできることをするだけだ。ボクの両手にはガムテープがある、これでヤツらを止める！ボクはガムテープで自分の口をふさいだ。次の瞬間、ヤツラの目標はボクの鼻の穴に……

ここも止める！

ボクは鼻の穴をガムテープで止めた。

次は耳だっ！

ボクは両耳が隠れるようにガムテープでぐるぐると自分の顔を巻いていった。

大丈夫、これでもう大丈夫。ちょっと息苦しいけど、ちょっと聞こえないけど、ちょっと見えないけど。

『でも……これで……だい……じょう……ぶ』

『苦しい……見えない……聞こえない……動けない……助けて……助けて』

『ボ・ク・ハ・マ・ダ・コ・ド・モ・ナ・ノ・ニ』

クルシイ……ミエナイ……キコエナイ……ウゴケナイ……タスケテ……タスケテ

いつの間にかボクの意識は「それ」と同化していた。ガムテープにぐるぐる巻きになったボクは、床に這いずり回り、穴と穴と言うところから侵入したヤツらといつの間にか意識が繋がるようになっていた。

ゴメンナサイ……

ゴメンナサイ……

ゴメンナサイ……

その日の朝、ボクはタオルケットにぐるぐる巻きになって、汗をびっしょりかいて目を覚ました。具合でも悪いのかという両親の心配をよそに、ボクは悪夢のことをずっと考えていた。

「なんでもない」

そう応えるしかなかった。教室に入るとU治は相変わらずマンガのキャラクターのモノマネをして陽気に振舞っている。

「グワシ！」

S夫は家の近くでボール遊びをしているときに、通りかかった車にボールを惹かれてしまい、ペシャンコにされたらしい。G朗はそんなS夫に向かって、「うそだー、どうせどっかになくしちゃたんだろう」とからかっている。

もう、終わったのだろうか？

その日、ボクらはいつもの公園に遊びにいった。今度はG朗のボールでこの前の続きを始めた。最初、陰鬱な気分だったけど、遊んでいるうちに、なんだかすべて終わったような気がしていた。だけど、ボールが前と同じように散策路の方に転がると、ボクは茂みの中に入る気にはなれなかった……なれなかったけど、ボールを投げたのはボクだった。

「取りに行けよー」

G朗が意地悪い言い方でボクをにらみつける。ボクは仕方がなく、散策路へ入っていった。ボクの不運はどうやらまだ続いているらしい。散策路の茂みの奥に、ヤマンバがボールを持って立っていた。

ヤマンバはたぶん、『アー、アー』と言ったのだと思うけど、『アー、アー』と言いたかったのかはわからない。ヤマンバは、ボールを下手で投げるような素振りをするが、その動作と『アー、アー』と聞き取りにくい声を揚げるだけでボールを投げはしない。

投げられないのか？

ボクは恐る恐るヤマンバのほうに近づいた。そのときだった。ボクの目の前をブーンと音を立てながら、黄色と黒の縞々模様――蜂が横切った。ボクは驚いて、後ろに飛びよけた。

「大丈夫さね」

ヤマンバがかろうじてそう聞き取れるような、喉に何かが絡まるような枯れた声で言ったのが聞こえた。

「え？」

聞こえたが、意味を理解できなかった。

「刺しはしないよ、ほれ、よー見てみ」

ヤマンバの視線の先にはツバキの木があり、その一部はチャドクガの幼虫によって食害されていた。それはまるで、ボクの心のようにボロボロに食い荒らされていた。近くに行かなくても解る――あそこには近づきたくない。ヤツらはボクの存在に気がつきながらも、もうボクに用はないという風なフリで目の前の獲物を食い漁っているにちがいない。

「アシナガよお」

ヤマンバのしゃがれた声も、ボクの耳にだんだんと慣れてきたようだ。アシナガバチはツバキの周りを旋回し、食事に夢中になっているチャドクガの幼虫をがっしりと抱え込み、大きな羽音を立てながら、茂みの中に消えていった。ほんの一瞬の出来事である。

「蜂はなあ、あーやって、毛虫を退治してくれる。なーんも、こええことはねーんだ」

毛虫を……退治してくれる？

「ホレ」

ボクはヤマンバがボールを直接手渡したいのだと気づくいた――たぶん、そうだったのだ。ボクはすっかりその場の雰囲気飲み込まれてしまった。これまでのヤマンバに対するそれこそ奇人や変人を見るような色眼鏡はすっかり消えてなくなっていた。でもきっと、どこかおっかなびっくりな様子だったに違いない。ボクはヤマンバのしわくちゃん手からボールを受け取った。

「ありがとうございます」

決して笑顔ではなかっただろう。けど、ボクは素直にその言葉を口にできた。

ヤマンバは振り向いて、しゃがみこみ、後ろにあった木の根あたりをスコップで掘り始めた。ヤマンバの背中越しに覗いてみると、そこには禍々しい色をしたキノコが生えていた。ヤマンバは園芸用のスコップでそのキノコを土ごと掘り出し、前掛けのポケットから取り出したビニール袋の中に入れ始めた。

「それ、どーするんですか？」

ボクはK山が言っていたことを思い出していた。まさかこれ食べるのか？それとも？

「これはな、これは、口にしたらエライことになるキノコじゃ」

つまり毒キノコ？

「いたずら坊主に見つかる前に、こうして採っておかないと危ねーからよ」

「えっ、じゃーこれ、毒キノコ？」

「まあ、そんなもんだ。だからよ、めったに触るんじゃねーぞ。わかったけ？」

「はい。あのお……さっきの蜂の話なんですけど……」

ボクは蜂が毛虫を食べるなんて知らなかった。

「アン？蜂？アー、アー、面白いもん見せてやっから」

ヤマンバは立ち上がってさっき蜂がチャドクガの幼虫を捕食したツバキの方に歩いていった。

ボクはそこには近づきたくはなかったけど、ヤマンバが手招きをするので、しかたなく近づいた。

ヤマンバは、チャドクガの幼虫に侵食されたツバキの葉の中から一枚の葉を指差した。

「ほれ、こいつの背中、綿簿っ子がついているだろ」

綿簿っ子？ヤマンバに言われた葉を見ると、そこにはチャドクガの幼虫が数匹ツバキの葉を食べていたが、そのうちの何匹かは背中に小さな白い綿がいくつもついていた。

「この綿はなあ、蜂の卵さね」

「蜂の卵？」

「さっきのアシナガバチはそのまま毛虫を団子みてえにして、蜂の巣にもっていくけどよ、なかには幼虫に直接卵さ植えつけちまうのもいるのさねえ」

そういえば聞いたことがある。昆虫好きのG朗が、ハエの中には他の生き物一一種類によっては人間の皮膚や眼球に卵を植えつけるヤツがいると。

「ボールあったか？」

G朗の声がする。

「あのお……ありがとうございました！」

ボクは、深々と頭を下げると、みんなのところへ駆け出した。ボクの足取りは、すっかり軽くなっていた。

対決

公園で思いっきりボール鬼を楽しんだこと、ヤマンバと話をしたことで、なんとなく気分がすっきりとしていたボクは、家に帰った——もう大丈夫。なんとなく、そう思っていたが、それは間違いであるとすぐに気づくかされた。

共働きの我が家では、父や母が帰るまでに洗濯物を取り込むこと、米を研ぐこと、食器を洗うことがボクと弟の仕事だった。今日の食器洗いは弟、ボクは洗濯物を取り込もうとした。夕方の陽射しはオレンジ色が少しくすんでいて、目に入いっても痛くはなかった。ボクらの住む会社の寮は西向きで、夕方の陽射しは直接部屋に差し込んでくる。

洗濯物を取り込むのに厄介なのは、シーツやバスタオルだ。地面に引きずらないように注意しなければならない。バスタオルは平気だけど、シーツやタオルケットはボクらの身長にはちょっとあまるのだ。ボクは昨夜、悪夢にうなされ、汗でびしょびしょになったタオルケットを取り込もうとして、一瞬息が止まった。

.....食い荒らされている.....ヤツらに.....藤の葉が.....食い荒らされている。

あれは.....あれは、悪い夢ではなかったのか！

ボクは母が帰る変なり、タオルケットの異常を訴えた。母は買い物袋から肉やら野菜やらを冷蔵庫にしまいながら言った。

「あー、これねー、間違っって漂白剤こぼしちゃって、あらあら、やっぱりだいぶ色が抜けちゃったわねー」

「そーか、そうなの」——やや安堵する。がしかし、そうなのか？それだけなのか？ はたして、本当に、そうなのか？ これは、ヤツらの仕業じゃないのか？

その夜、ボクは部屋の明かりが消され、みんなが寝静まるまで、タオルケットのなかでじっと待っていた。また、あの感覚がボクを包み込む。時間が揺らぎ始める。

来る。きっと、来る。

やがて「静寂の音」がボクの耳の中でキーンと響き始めた。

.....ほら、来た！

冷蔵庫は深夜の宴を初め、時計はカチカチカチからチカチカチカに変わった。

.....そうだ、ヤツらはきっと来る！

ボクはタオルケットから首を出し、天井を眺めた。天井には何かシミのような、模様のようなものが、少しだけ蠢いた様な感じがした。

.....同じだ！ヤツらだ！ヤツらが来た！

『でも、ボクは、大丈夫.....大丈夫だ』

ガムテープなんか使わなくたって、ボクは大丈夫。

ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ

.....来た！

天井に蠢く小さなシミは、次第にヤツらの姿に代わって行った。

『大丈夫、ボクにはできる。ボクにはできるんだ！』

ボクは、必死に念じた。繰り返し、繰り返し、どんなに怖くても、どんなに恐ろしくても.....

『蜂、アシナガバチ、アシナガバチは毛虫をやっつける！』

ボクは公園でみた足長バチの姿を必死で思い出していた。

『黄色と黒の縞々の.....ブーンと音がする羽。三角の頭、鋭いキバ、長い足.....それから、それから.....』

コワイ、コワイ、コワイ

ガムテープ、ガムテープ、ガムテープ

『いない！ガムテープはもう、いない！もうボクにはいない！』

タスケテ、タスケテ、タスケテ

クルシイ、クルシイ、クルシイ

『黄色と黒の縞々でブーンと音がする羽。三角の頭、鋭いキバ、長い足。目は、目は、大きくて.....長い触角。』

ヤメロー、ヤメロー、ヤメロー

『部屋の窓の隙間から――そう、換気扇の隙間からだって入って来る！黄色くて、黒くて、縞々で、お尻が大きくて、羽は、羽は茶色で、三角の頭、長い触角、大きい目、鋭いキバ、ブーン

と音が！』

ブーン

それは暗がりの中で、どこからともなく聞こえてきた。蜂の、足長バチの羽音。

『そうだ、そこだ、あそこにいるんだ！毛虫が！』

黒いシミははっきりとしたチャドクガの幼虫の形になったようにみえた。それが恨めしそうにボクをにらんでいる。いまにもボクに飛び掛りそうな感じがしたけど、ボクには次のイメージが見えていた。身体を振り子のようにしてボクの顔めがけて跳躍しようとしている毛虫を足長バチが鋭い牙で噛み付き、どこか闇の中に持ち去る姿を……

『今だ！行け！』

それは目にも留まらぬ速さで、ボクの視界を横切り、天井めがけて飛んでいった。ボクの全身にワサワサとした感覚がよみがえり、一瞬ボクの顔めがけて、毛虫が跳躍したようにみえたが、アシナガバチは獲物を捕らえ、闇のかなたに姿を消した。

見上げると天井の黒いシミはなくなり、時計の音が『チクタク、チクタク……』と心地よいリズムを刻んでいるのが聞こえた。ボクの意識はそこで途切れた。

終わったのか……終わったんだ、多分……

カーテンの隙間から明かりが射す。まだ、誰も起きていないようだ。タイマーセットされたステレオラジオからいつもの音楽が流れてくる。

『おはようございます。今日は快晴、朝から気温もだいぶ上昇するようです。それでは交通情報です。道路交通センターの石黒さんをお呼びしてみましよう。石黒さん！』

ボクはすっきりとした目覚めの中で、昨日の夜のこと、そして、今日までおきた一連の出来事を振り返った。

やっぱり、桜堂の気のいい老夫婦にあやまらないといけない……

ボクはヤマンバに自然と言えた『ありがとう』の言葉と、これから言わなければならない『ごめんなさい』の言葉が、ボクらが開けてしまった『闇の扉』を閉じるために必要なカギではないかと思い始めていた。

存在の確認

小学5年生のボクーその後、二度とあの悪夢にうなされることはなかった。確か、そうだったと思う。私はすっかり忘れてしまっていた。あれはただの夢だったのだろうか。そう、いまならこう思える。あれはボクの罪悪感が生んだ幻覚。現実ではないけれど、現実以上にリアルな体験。たしか、あのあと6年生が桜堂の倉庫に侵入し、ものをとった事が発覚し、学校で大きな問題になった。そしてボクは、謝るタイミングを失ってしまった。

『このことは誰にも言わないようにしよう』

多分ボクらがずっと今まで守ることができた唯一の秘密だ。私は今、どうしようもなく申し訳ない気持ちで一杯である。でも、友だちは裏切れない。もしボクらも関わった事がバレでもしたら治がどんなことになっていたのか、そっちのほうが怖い。しかしー

私は校舎を後にして、桜堂のあった空き地の前に立った。

「あの時はごめんなさい」

頭を下げ、その後手を合わせた。

誰にでも怖いものはある。

でも、それに打ち勝つことのできる力を、誰もが持っているのだと私は思う。小学校5年生のボクは成長し、自立し、妻と出会い、子を授かり、育てている。

息子は小学校3年生になるが、今、まさに恐怖を抱えているようだ。

「パパァ.....あっちの部屋に寝るとねえ、シーンって音がするから眠れないよ」

娘は小学校5年生、時々夜中に泣きながらワタシを起こす。

「怖い夢を見たの。街にね、ひとりになっちゃって.....パパもママもいたのに、いつの間にかひとり.....そしたらね、ゾンビみたいのが追いかけてくるの」

娘や息子はどうやって恐怖の打ち勝っていくだろうか？私が闇の中に『存在を確認した恐怖』は今でも私たちのまわりに潜んでいるにちがいない。人は過ちを犯す。そのことに気づくかないときもある。自分では気づいていなくても、もう一人の自分ー潜在意識の中にある『悪を攻める心』は、ときに恐怖という形で襲ってくることもあるのかもしれない。

私は母校を後にし、子供たちの待つ公園へいった。

「ねえ、ほかの公園行ってみようか。そこからは新幹線が見えたりするんだ」

好奇心旺盛な娘は行ってみたいといい、息子はもう少しここで遊びたいと言った。こういうときは姉の意見が通る。息子はしづしづ私の後をついてきた。思い出の公園――ヤマンバがいた公園は、昔とちっとも変わっていなかった。代わっているのは周りの風景である。

「きゃー、毛虫」

娘が地面を這う一匹の毛虫を見つけた。

「気持ちわるーい」

息子も怖がる。最近ではめったに見る事がない。

「この毛虫は、パパに会いに来たのかもしれないな」

子供たちは顔を見合わせ不思議そうな顔をする。

「わー、毛虫だ！」

そこに別の子供たちがやってくる。たぶん地元の小学生だろう。

「えーい！」

一人の子が、毛虫を思いっきり踏みつける。

「きゃー」

娘が悲鳴をあげる。息子は怖がり、一步後ろに下がった。私は一瞬大いなる怒りを覚え、少年たちを睨みつけてしまった。言葉は出なかった。

「このー、このー」

何度も踏みつける少年。彼の目には少しばかりの恐怖が宿っていた。私は少年に話しかけようと思ったが、何をどこから話せばいいのか、わからなかった。

「逃げろー」

少年たちはどこかに行ってしまった。

「いいかい。よく聞くんた。小さな虫にも、それが毛虫でも命がある。命を粗末にすると、怖い事が起きる。そういう事が世の中にはあるんだよ」

「怖いことって？」

娘は怯えながら聞いてきた。

「お化けが出るとか？」

息子の発想は実にユニークだ。そしてときにそれは的を得ている。

「そうだね。それはきっとあの子達がこれから体験するだろうから、あの子達に聞けばわかるかもよ」

息子は首をかしげ、娘は少しだけ納得したような、だまされたようなそんな顔をした。

「でもね。逃げたらダメなんだ。逃げたらずっと追いかけられる。怖い夢にね」

私をここに呼び寄せた何かは必ず存在する。私は――ボクはあの夜その存在を確認した。そし

て今、再び確認した。

そういうことは『ある』のだと。

おわり

蟲夢

<http://p.booklog.jp/book/33335>

著者：めけめけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mequemeque/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33335>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33335>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.